

大学における試験と学生の期待との最適化の可能性

SAUZEDDE Bertrand

Université Ritsumeikan
sauzedde.bertrand@gmail.com

KISHIMOTO Seiko

Université Ritsumeikan
seiko_pommier@hotmail.com

この論考は、大学における評価に関する学生の意識について、第28回関西フランス語教育研究会において発表したアトリエの内容をまとめたものである。学生を評価するにあたり、教員はややもすると効率的だと思い込んでいる方法や内容に留まっていることがよくある。しかし、純粹に教授法的視点から、一度は評価の役割を交代し、実際に評価される側の意識に注目してみるのも興味深いのではなかろうか。

アンケート実施の対象者：

この問いに答えるため、我々は立命館大学の75名の学生に対してアンケート調査を行った。対象者の内訳は、2年生33名、3年生42名である。従って、フランス語レベルも DELF A2 から B1 程度に達しているモチベーションの高い学生を対象とする。アンケートは選択式で、8つのカテゴリーからなり、91の質問を含む。

アンケート結果：

a. 学生自身によるフランス語能力の自己評価（質問 1）

最初の質問は、言語の4技能について学生自身が自己のフランス語能力をどのように捉えているのかについて問うたものである。その内訳は文書表現、口頭表現、文書理解、聴解の4つである。

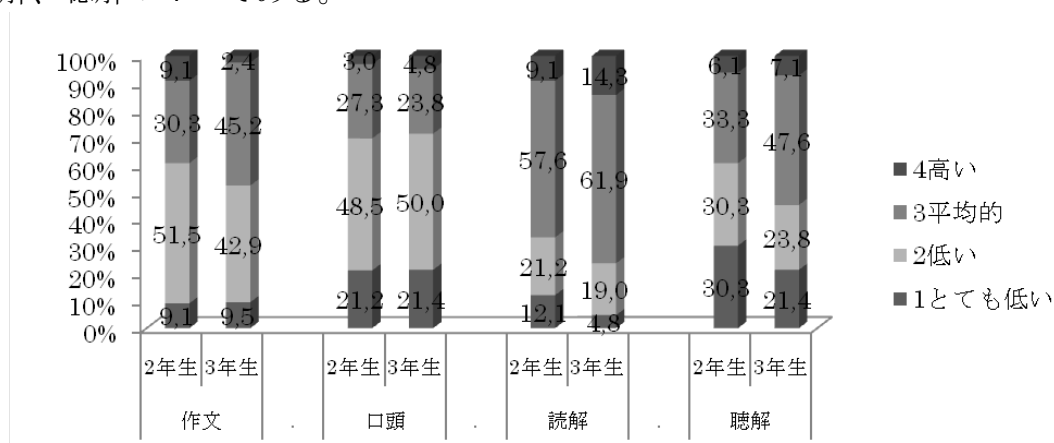


図 1. —4 技能についての学生自身による自己評価の相違 (2A : 2 年生、3A : 3 年生) :

文書表現 (作文) , 口頭表現 (口頭) , 文書理解 (読解) , 口頭理解 (聴解)

この表から読み取れることとして、学生は他の技能と比較すると、文書理解において最も優れていると実感していることが挙げられる。この能力において劣ってい

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

ると感じているのは2年生では33.3パーセント、3年生では23.8パーセントのみである。それに対し、他の3つの能力に関しては、2年生の大多数がそれぞれについて能力が低いあるいはとても低いと捉えている。口頭表現を除き、3年生ではこの感覚は少し改善される(文書表現:52.4パーセント、文書理解:23.8パーセント、聴解45.2パーセント)。以上から、学生は2年生から3年生に進級するにつれ、フランス語能力において明確に進歩を感じていると言える。聴解においては、3年生の大多数がそれなりのレベル(平均的、高い)に達していると感じているようで、2年生には見られなかった傾向である。このグラフは従って、2年次から適切に技能を習得していると感じている文書理解よりも聴解能力のほうが習得に多くの時間を必要とするという個人的な実感を浮き上がらせている。それに反して、3年次の終盤の時期になっても言語の産出的側面に関する能力は不十分だと感じている。

b. 試験評価の厳しさ(質問2)と出席率(質問3)

2年生のうち30.3パーセントの学生が評価は厳しい(厳しすぎる、やや厳しい)と感じている(図2)。この意識は3年次では大きく低下する。3年生で評価がやや厳しいと感じているのはたったの9.5パーセントである。

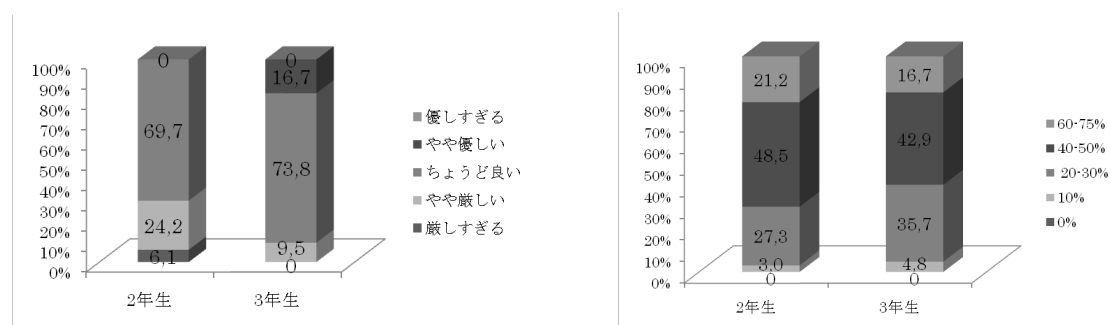


図2. 一教員による評価に対する厳しさの感じ方(%)と評価への参入を望む授業出席率

この数値の低下はおそらく、評価に際し、教員が学生に期待していることを学生自身が容易に察することができるようになることに起因しているからであろう。2年次と3年次の間で見られる数値の開きは1年次から2年次進級時に経験する違いほど大きくない。また、慣れというものも要因になるであろう。しかしこれは教員にとっては試験の際に扱う内容において要求が強くなるきっかけにもなる。

日本のほとんどの大学において、授業の出席率がかなりの割合で評価基準に割り当てられているが、このことはしばしば問題を引き起こしている。というのも、1年生のうちのかかなりの人数の学生が、たとえそれが受動的態度であろうとも、ただ出席するだけで単位を取得するには十分であると考えているからである。そこで、3つ目の質問(図2、右のグラフ)の結果をみると、2年生の約70パーセントが単位取得のためには出席を40~75パーセント程度の割合で成績評価に組み込んでほしいと願っている。3年生においてもこのパーセンテージは学生の約60パーセントに達している。この数値はかなり高い位置で留まっていると言わざるを得ず、これは学生が日頃から出席のみで多くのポイントを獲得しようという態度で授業に臨んでいることがよくわかるだろう。2年生と3年生の間で数値が10パーセント低下しているのは、いくつかの理由に起因すると思われる。3年生は就職活動に

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

奔走しなければならず、結果的に多くの欠席日数がカウントされることになる。従って、あまりに多くのポイントが出席率に割り当てられることは彼らにとって有利にならず、3年生では試験や宿題の参入率が高い評価方法を好む学生が少なくない。また、前項におけるグラフの結果で見たように、彼らの自己のフランス語能力に対する自信が上がるにつれ、自分の能力と努力に見合った最終評価を好むようである。

c. 試験に対する意識（質問 4～8）

この調査では、5つの設問にそれぞれに17の解答項目がある。これら17項目は学生が大学生活を通して経験したそれぞれの異なる試験方式に対応している。試験は4つの言語能力に準じている（図3）。これら5つの質問は、学生が経験したさまざまな試験に対して、彼ら自身がどう考えているかをよく認識することを目的としている。そのために、次の5つの基準を設けた。1つ目の基準は、それぞれの試験に対してどの程度好感度があるかを測るもので、これを質問4とする。2つ目の基準は試験の頻度に関するもので、学生があらゆるタイプの試験について十分な量の試験を受験しているか否かという問いである（質問5）。3つ目の基準は個々の試験に対してどの程度ストレスを感じているかを問うものである（質問6）。4つ目の基準は、各試験を受験するにあたり、要した準備時間を問うものである（質問7）。そして最後の基準は、学生が試験を通してどの程度上達を実感することができたかを測ることを目的としている。換言すれば、ある試験を受けることは別の種類の試験を受験するのと比較して、自己のフランス語能力において進歩が感じられたかどうかを問うている（質問8）。

それぞれの試験項目に対し、学生には6つの選択肢が与えられている。好感度に応じたそれぞれの試験の順位表をみると（図3.a）、学生はさまざまな言語活動についての先入観を持っていないことがわかる。

a) 試験に対する好み(最も好ましいものから順に)

Total		2年生		3年生	
試験	Score	試験	Score	Exam	Score
7	112.3	7	106.5	7	116.7
2	60.6	11	45.2	2	92.9
11	40.9	16	28.1	9	65.8
9	37.1	5	15.6	1	48.8
16	36.8	6	15.2	5	45.2
5	32.4	2	13.8	16	44.4
6	27.0	15	12.0	11	37.1
10	19.7	10	11.5	6	36.6
15	14.6	4	3.1	10	25.7
4	11.7	9	3.1	14	23.5
1	4.2	13	0.0	4	21.4
14	1.6	8	-17.9	12	19.4
13	-2.2	14	-23.3	15	17.4
12	-9.5	17	-44.0	13	-4.0
3	-26.9	12	-48.1	3	-5.7
17	-30.2	3	-50.0	17	-17.9
8	-35.3	1	-54.8	8	-56.5

b) 試験の頻度(頻繁すぎるものから不十分なものへ)

Total		2年生		3年生	
試験	Score	試験	Score	試験	Score
1	18.1	1	38.7	7	7.1
3	11.1	3	36.7	1	2.4
7	11.0	4	25.8	5	-2.4
4	10.2	2	25.0	2	-2.4
2	8.7	9	21.9	4	-7.1
9	5.7	7	16.1	9	-7.9
5	1.3	6	9.1	3	-12.1
8	-2.1	8	7.7	8	-13.6
11	-4.8	11	6.7	15	-14.3
6	-6.7	5	6.1	14	-14.7
16	-7.9	10	3.8	16	-14.7
12	-11.9	16	0.0	11	-15.6
10	-12.7	12	-4.0	12	-17.6
15	-13.6	17	-5.0	6	-19.0
14	-14.5	13	-6.3	10	-27.6
17	-18.2	15	-13.0	13	-28.6
13	-18.9	14	-14.3	17	-29.2

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

c) 試験に対するストレス(最もストレスの強いものから順に)

Total		2年生		3年生	
試験	Score	試験	Score	試験	Score
3	53.1	12	95.8	3	21.9
8	51.0	3	84.4	12	17.6
12	50.0	8	82.1	8	13.0
4	37.3	1	80.6	4	0.0
11	18.5	4	68.8	11	-5.9
10	12.5	2	60.7	10	-9.7
1	8.5	13	50.0	13	-22.7
13	7.9	11	45.2	5	-24.4
9	1.5	10	40.0	6	-24.4
5	-2.7	14	37.5	9	-27.0
15	-4.5	9	35.5	17	-39.1
6	-6.8	15	31.8	15	-40.9
2	-7.4	5	24.2	14	-42.4
14	-8.8	6	15.2	1	-47.5
17	-26.2	7	-3.2	2	-55.0
7	-43.1	17	-10.5	16	-55.9
16	-45.0	16	-30.8	7	-73.2

d) 試験準備にかかった時間(分)

Total		2年生		3年生	
試験	Score	試験	Score	試験	Score
11	85.4	11	91.8	2	93.8
10	85.0	8	90.9	7	81.8
2	83.8	10	90.0	10	80.8
7	81.3	1	81.8	11	80.0
1	78.5	7	80.6	6	78.0
6	76.7	6	75.0	12	78.0
8	76.5	5	74.1	5	77.3
5	75.8	4	72.7	13	77.0
12	71.5	9	72.7	1	75.8
9	69.9	2	71.8	9	67.5
4	69.6	3	71.8	4	66.9
13	69.6	12	63.6	3	66.5
3	69.0	13	60.9	17	64.6
17	60.0	16	56.1	8	63.9
16	59.6	17	54.2	16	62.2
14	57.5	14	53.2	14	60.7
15	54.8	15	51.0	15	57.7

e) 試験を通じた能力の進歩(最も進歩が感じられたものから順に)

Total		2年生		3年生	
試験	Score	試験	Score	試験	Score
5	120.3	5	113.3	6	128.2
6	115.9	7	113.3	1	126.3
7	114.5	6	100.0	5	125.6
1	111.8	1	93.3	12	116.1
2	95.6	4	93.3	7	115.4
4	94.7	2	89.7	17	113.0
12	89.1	8	82.1	3	105.9
9	88.2	10	76.9	14	103.2
3	85.9	9	74.2	2	100.0
10	83.6	3	63.3	9	100.0
17	83.3	12	54.2	13	100.0
8	82.7	17	47.4	4	96.3
14	74.5	16	45.8	15	95.2
16	69.6	11	41.4	10	89.7
13	68.6	14	37.5	16	87.5
15	67.5	15	36.8	11	86.7
11	64.4	13	31.3	8	83.3

作文	1	フランス語訳(日本語→仏語)
	2	作文(辞書有)
	3	作文(辞書無)
	4	初見のテーマで作文(辞書無)
	5	文法
	6	語彙
読解	7	日本語訳(仏語→日本語)
	8	文章を読み、フランス語で要約
	9	文章を読み、設問に答える
口頭	10	口頭発表
	11	対話の発表
	12	面接試験
	13	暗唱
聴解	14	聞き、設問に答える
	15	ビデオを見、設問に答える
	16	聞き、空欄を埋める
	17	聞き、全文を書取り

図3.-質問4~8の結果

学生は筆記での活動を好むまたは苦手とする、あるいは逆に口頭での活動を好むまたは苦手とする、といった先入観で言語の産出的側面あるいは理解の側面など特定の活動を優先する傾向のある教師もいるが、実際には、学生は筆記であろうと口頭であろうと、産出に関する問題も理解に関する問題も同等に高く評価しているようである。それに反して、彼らは筆記試験を受ける機会が多すぎると捉えているようである。というのも、すべてのタイプの試験に関する試験頻度について結果を見ると(図3.b)、頻度が高すぎるという項目に関する試験タイプのうち上位7項目はすべて筆記に関する試験であった。それとは逆に、最も受験する頻度の低い試験は下位から7項目すべて口頭に関する試験である。これは明らかに教師がもう一度熟考すべき要点である。学生は表現に関するものであろうと理解に関するものであろう

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

うと、オーラル試験を頻繁に受験する機会があることには異論はない。その上、このことは学生が口頭理解の試験をストレスの多いものとしては捉えていないことによって裏付けられている(図 3.c)。例えば、最もストレスの少ない4つの活動のうち、3つの項目が口頭理解の活動に該当する。それに反して、口頭表現は我々が予想できるように、ストレスのかかる試験のタイプの代表格である。しかしながら、学生たちはグループでのダイアログ作成や口頭発表などの特定の活動に関しては、かなり好意的反応を示している。彼らが足を踏みとどめてしまうのは教員との面接や暗唱など孤独を感じるようなタイプの試験である。従って、彼らが困難に感じる要素は試験自体に内在するのではなく、彼ら自身における自信の欠如や、おそらく練習不足といった要素が大きいと言える。

進歩に関する質問については(図 3.e)、文法、語彙、訳(和訳、仏訳)の問題が最も学生の進歩を促したものであったと言える。これは伝統的教育法の賜物であろう。口頭活動に限定して結果を読み解くと、2年生の学生は口頭活動において、自己の進歩を感じるには十分なレベルに達してはいないようだ。これはそれほど驚くには値しない。というのも、学生は筆記ではうまくいくのに、口頭となると思うように自己表現できないというフラストレーションを頻繁に表明している。3年生は、教員との面接試験、聴解試験、書き取り試験において最も進歩したと感じている。口頭活動に重点を置く教育法を採用すれば、おそらくこういった感情をより早く萌芽させることができるであろう。

しかしながら、こういった口頭活動に関する能力についての自信の欠如は総てが学生のみ、あるいは教員のみ責任ではない。というのも、聴解に関する練習は最も取り組みの少ない分野であると教員自身が自認しているからである。したがって、聴解試験は必然的に学生にとっても最も準備の少ない分野になっている(図 3.d)。その上、口頭に関する活動が、授業中でも教科書でも、実際に非常に多くの場合、最もなおざりにされている分野であることを考慮すると、学生たちが口頭活動において難しさを実感し、学生の相当数が自身のフランス語能力の弱点だと捉えていることは、まったく驚くには当たらない。

結論 :

この調査を遂行することで、学生が試験に関して実感していることを詳らかにすることが可能になった。多くの教員の想像に反して、学生は多くの努力を口頭活動に割きたいと願っている。もちろん、そういった欲求に応じて、取り組みたい試験やそうでない試験を選択するのは学生ではない。しかし、この調査を通して、ある試験を好むか好まないかの影響が持つ異なる要素について、我々は詳細なヴィジョンをもつことができる。また、学生自身が実感している学習を通じての言語能力の伸張やレベルの進歩を無視してはならない。これまで見たように、2年生と3年生では試験に対して何を求めているかが異なっている。また、上級レベルの学生については、さらなる要因を考慮する必要があるだろう。